

## ブレーメン「市立自然・民族・商業学博物館」の アフリカ民族品コレクション

谷 澤 毅

目次

はしがき

1. ブレーメン市立自然・民族・商業学博物館とアフリカ
2. 収集手段から見たアフリカ民族品コレクション
  - (1) コレクションの増加過程と収集手段
  - (2) 寄贈
  - (3) 購入・交換
3. アフリカ民族品収集の担い手

結び

注

### はしがき

本稿では、ブレーメン海外博物館 (Übersee-Museum) がその前身の「市立自然・民族・商業学博物館」(Das städtische Museum für Natur-, Völker- und Handelskunde) の時代に収集したアフリカ民族品のコレクションに光を当てていく。すでに、筆者は「商業都市に博物館をつくる — ブレーメン「市立自然・民族・商業学博物館」の近代」という題目でこの博物館の収集品に視点を置き、博物館設立の経緯について論じたことがある<sup>1)</sup>。本稿はこの前稿の補遺として位置づけられる小論である。以下で扱うアフリカ民族品に関するデータも前稿と同様、ベッティナ・フォン・ブリスコーン (Bettina von Briskorn) がアフリカ民族品の収集過程を明らかにした研究書 (2000年) に依拠している<sup>2)</sup>。

19世紀末から第一次世界大戦までの短い期間とはいえ、ドイツはアフリカの中部から南部にかけて植民地を有していた。本稿では、市立自然・民族・商業学博物館の植民地を中心とするアフリカの民族品のコレクションを取り上げ、ブレーメンおよび同博物館とアフリカとのかかわり、民族品収集の手段、そして収集の担い手の

順に探っていく。なお、以下で頻出する「博物館」は、この「ブレーメン市立自然・民族・商業学博物館」を指す。

商業都市であるブレーメンは、ハンザ都市として海外進出の伝統を長年にわたり継承してきた。新興国家ドイツにおける海外進出熱の国を挙げての高まりを契機として、ブレーメンでは博物館を舞台としてアフリカの民族品はどのように収集されていたか。以下では、この点を解明しつつ、商業都市としてのブレーメンの属性やドイツの植民地政策を念頭に置きながら、アフリカ民族品の収集という側面からブレーメンが誇る博物館の特徴や性格の一端に触れてみることにしたい<sup>3)</sup>。

## 1. ブレーメン市立自然・民族・商業学博物館とアフリカ

統一（1871年）後のドイツでは、植民地獲得運動が大きな盛り上がりを見せた。1882年のドイツ植民地協会（Deutscher Kolonialverein）の成立は、ドイツの海外への躍進を夢見る人々の熱狂から生まれたものであり、植民地に向けたさらなる意識の高揚を目的とするものでもあった。

むろん、港町であるブレーメンでも、それほど長くは続かなかったとはいえ、植民地熱はかなりの高まりを見せた。はやくも植民地協会設立の翌年、宰相ビスマルクの支援を受けて南西アフリカのアンゴラ（Angra Pequena）に上陸したのはブレーメンのタバコ商人アドルフ・リュデリッツ（Adolf Lüderitz）であり、リュデリッツのもとで広大な土地の獲得に力を入れていたのもブレーメンの商人ハインリヒ・フォーゲルザンク（Heinrich Vogelsang）であった。1884年から85年にかけて開催されたベルリン会議では、まずは南西アフリカをはじめトーゴ、カメルーン、そして少し遅れて東アフリカのドイツ領有が認められた。それは、あたかもアフリカにおけるブレーメン市民を含むドイツ人の積極的な進出と現地での活動にお墨付きを与えるような意味を持った。植民地と本国との貿易においても、主導的な役割を担ったのはハンブルクとともにブレーメンの商社であった。植民地と本国の間の航路の開拓では、北ドイツ・ロイド社が有力な海運会社の一つとして重要な働きを見せた。これもブレーメンの企業である<sup>4)</sup>。

概して言えば、ドイツの対植民地貿易はハンブルクが中継地となることが多く、ブレーメンの経済においてアフリカをはじめとする植民地が占める比重はそれほど大きくはなかった。しかし、植民地獲得の動きはブレーメンの経済界を確実に巻き込み、それは、市民に開かれた大規模な催しからもうかがうことができた。1890年にブレーメンの市民公園で開催された「北西ドイツ工業・産業博覧会」（Nordwest-

deutsche Gewerbe- und Industrieausstellung)は、「商業・植民地博覧会」(Handels- und Kolonialausstellung)の部門を含み、アフリカの展示スペースではドイツ植民地産の商品や原材料のサンプルとともに各種民族品が陳列された。それに加えて、現地のドイツ保護軍の制服をまとった下士官の人物像二体やドイツ士官の装備品なども展示され、現地ドイツ人の活動の様子が一般市民にも理解できるよう工夫がなされた<sup>5)</sup>。博覧会と同様、広くモノや情報を集めて展示する場である博物館(市立自然・民族・商業学博物館)でも、増築工事を契機として植民地の経済や民族、現地におけるドイツ人の活動に関する展示に力が注がれていく。このようなアフリカ植民地に対する関心の高まりとともに、アフリカ民族品のコレクションも規模を拡大させていくのである。

さて、当博物館に収められた最初のアフリカ民族品は、記録によれば、1841年に寄贈されたアフリカ西部・ムーア人製の絹織物であり、これは現存するという。まだ市立自然・民族・商業学博物館が開館(1896年)する前、ブレーメン「市立自然史・民族学コレクション」のさらに前身であるゲゼルシャフト・ミュージアム(社会博物館: Gesellschaft Museum)と呼ばれていた頃の入荷である。次いで、1845年から46年にかけてやはりアフリカ西部に由来する武器その他の受け入れがあった。これらは現存していないようである。少し間をおいて1858年に3回目の納品があり、その後アフリカ民族品の寄贈が増えていった<sup>6)</sup>。1881年には、現地でキリスト教の布教に従事する宣教団の一つである北ドイツ・ミッションから142点、医師で旅行家のエミール・ホルプ(後述)から41点という規模の大きな寄贈も実現し、博物館のアフリカ民族品コレクションは一挙に四倍以上に増え(232点)、1896年1月15日の博物館の開館までに、その数は801点に達した。その後も、ドイツによるアフリカ植民地支配の強化、拡大とともに、その点数は増加を見せていく。

1902年、博物館はカメルーン総督イエスコ・フォン・プットカマー(Jesco von Putkamer)のもとで軍の司令官を務めたオルトヴィヒ・フォン・カムプツ(Oltwig von Kamptz)からコレクション一式330点を3,000マルクで購入した<sup>7)</sup>。以下でも触れるように、そこにはチバチ(Tibati)にあったイスラム勢力の宮殿から強制的に持ち出された品々が含まれていた。1907年には、初代トーゴ総督を務めたアウグスト・ケーラー(August Köhler)の大型のコレクション889点が博物館に寄贈された。

「20世紀最初のジェノサイド」として知られる南西アフリカ(現ナミビア)を舞台とした「ヘレロ・ナマの蜂起」も、博物館のアフリカ民族品コレクションの拡大と無縁ではなかった。1904年のヘレロ、そして同年から1908年まで続いたナマによ

る蜂起と彼らに対する大規模な虐殺は、ブレイメンでも新聞等でセンセーショナルに取り上げられ、市民の大きな関心を集めていた。これを受けて、博物館でも南西アフリカに因む展示品の収集に力が注がれ、1904年10月にはドイツ領南西アフリカの現地政府に対して民族品収集への協力を依頼したほか、それに先駆けて同年4月には、オルデンブルク在住のボッシュェン（Boschen）なる彫塑家にヘレロ族の集団人物像の作成を依頼している。この彫塑家は、ヘレロの写真やスケッチを参考に女性3体、男性と子供それぞれ1体を作成し、この5体からなる人物像は1905年の秋に1,500マルクと引き換えに博物館に収められた。

また、ドイツの南西アフリカ政府から民族品の収集者を推薦してもらい、博物館側が彼らに対してヘレロ、ナマ、オヴァムボ（Ovambo）、サン（San）といった南西アフリカ諸族の民族品とともに人骨や家畜、各種動物の収集を依頼したこともあった。1907年、博物館はあるミッション関係者を通じて南西アフリカのカリビブ（Karibib）で商店と車両の製造業を営むE・ヘルビヒ（Hälbich）なる女性に、上述のヘレロ族の人物像を中心とするジオラマ作製のために同民族に関係する様々なモノの収集を依頼した。やがてヘルビヒから書簡が届いたが、そこには、見栄えが良くして価値のあるかつての品を調達することは現在ではたいへん困難であり、新たに現地の人々に作成してもらうことになるであろうこと、伝統衣装を身にまとったヘレロ人など一人たりとも見当たらない、戦争が状況を激変させてしまった、過去を偲ばせるものはすべて永遠に失われてしまった、との内容が記載されていた。「20世紀最初のジェノサイド」による破壊行為の大きさが、この書簡の内容からうかがえる。博物館の行動は遅すぎたとブリスコーンは述べる。結局、ヘルビヒはミッション関係者を介して現地の人々に新たな民族品の作成を依頼したとのことである。

植民地主義の高まりは、植民地の獲得と支配の強化を通じて現地の多くの人々の命を奪っていった。加えて、モノの破壊・棄損や新たな生活習慣の強制などを通じて伝統的な文化の途絶・滅亡にも道を開いてしまったのである<sup>8)</sup>。

## 2. 収集手段から見たアフリカ民族品コレクション

### (1) コレクションの増加過程と収集手段

ここでは、現海外博物館が1993年から精査を開始してデータベース化されたアフリカ民族の品を扱う。このデータベースは、1993年の時点で博物館の「B所蔵品台帳」(B-Inventarbücher)をはじめとする博物館の資料に記録が残るアフリカの民族品を対象としたもので、1841年から1993年までに博物館に収められた16,463点が

含まれる。ただし、以下考察の対象となるのは実際に分析に携わったブリスコーンに従って、おもに1841年から終戦の1945年までに入荷された10,039点を中心とする<sup>9)</sup>。

なお、上記「B所蔵品台帳」のBはアフリカを示す。1893年に民族学者ハインリヒ・シュルツ（Heinrich Schurtz）が博物館の研究助手（Hilfsbeamter）として勤務を開始すると、彼は既存の民族品の地理的観点からの再整理を試みるとともに、新たな民族品の収集にも力を注いでいくことになった。ちなみに、採用されたアルファベット記号は、Aがアジア、Bがアフリカ、Cがアメリカ、Dがオーストラリア、Eがヨーロッパを示す<sup>10)</sup>。また、1841年が開始年とされるのは、上でも述べたように、この年に初めてアフリカ民族品の入荷があったことによる。自然・民族・商業学博物館が、まだゲゼルシャフト・ミュージアムと呼ばれていた頃である。

アフリカの民族品はどのような手段で入手されたのであろうか。ブリスコーンは、1841年から1945年までに博物館に収められたアフリカの民族品10,039点を納入手段の観点から分類している。それによると、全体の53.7%に当たる5,395点が購入によるもので、38.7%に当たる3,883点が寄贈によるもの、1.9%（194点）が交換による入手であり、さらに552点（5.5%）は貸与品、15点（0.1%）が記録なしとされる。ここに示されるように、所蔵品のほとんどは購入か寄贈によるものであり、しかも購入が寄贈を10ポイント以上も上回っていたことがわかる<sup>11)</sup>。

1945年までの年度ごとのアフリカ民族品の入手状況を見ると、博物館開館（1896年）前の時代は入荷がない年も多かったものの、開館以降は毎年なにがしかの入荷が記録されている。とはいえ、年度ごとのばらつきは極めて大きく、少ない年で1点（例えば1915年）、最も多い年で997点（1926年）に達した。年平均で見れば、一年間に96点の増加となる。大規模な寄贈や購入が実現した年は、それだけ入荷量が突出して多くなる。例えば1907年は初代トーゴ総督アウグスト・ケーラー（August Köhler）の遺産889点が寄贈された年であり、この年のアフリカ民族品の入荷は合計930点であった。これに対してその前年の1906年は11点、後年の1908年は60点に過ぎない<sup>12)</sup>。

以下、民族品の主要な入手手段である寄贈と購入について、少し立ち入って見てみたい。

## （2）寄贈

まず寄贈について見ていくと、上述のように1841年から1945年にかけて当博物館

に寄贈されたアフリカの民族品は、3,883点であった。年度ごとに見ると、博物館開館以降はやはり毎年寄贈の記録はあるとはいえ、ばらつきは大きい。最多の年で889点（1907年：上述のA・ケーラーの遺産の寄贈）、最少の年で1点（1915年）であり、平均で年間に37点の寄贈があったことになる。

全体的な傾向を見ると、博物館の開館を境として寄贈がコンスタントに、しかも数多く実施されるようになった。開館前の10年間と開館後の10年間の寄贈について具体的に見ると、開館前の1886年は4点、1887年は21点、1888年は2点、1889年から1892年にかけてはゼロ、1893年は1点、1894年は294点、1895年は2点、計324点であった。これに対して開館年の1896年は37点、1897年は80点、1898年は26点、1899年は51点、1900年は77点、1901年は144点、1902年は92点、1903年は40点、1904年は50点、1905年は339点、開館年を含めた10年の合計は936点となる。寄贈によるアフリカ民族品のコレクションの拡大は第一次世界大戦期まで続くが、それ以降（1918年以降）は、毎年の寄贈は続くとはいえ、納品点数は戦前より減少する。大型の寄贈が減ったのである<sup>13)</sup>。

大型の寄贈は、博物館のコレクションを拡大させていくうえで大きく貢献した。例えば、1945年までに実施された100点以上の寄贈を挙げれば以下となる<sup>14)</sup>。

- 1881年 北ドイツ・ミッションによる142点
- 1894年 商業博覧会（北西ドイツ工業・産業博覧会：1890年）の民族品252点
- 1905年 ベルリンの自然科学者ゲオルク・シュヴァインフルト（Georg Schweinfurth）による168点  
ブレーメンの私人ヨーハン・アドルフ・イケン（Johann Adolf Iken）の遺言による117点
- 1907年 上述の初代トゴ総督を務めたアウグスト・ケーラーによる889点
- 1909年 ブレーメンの商社フィートァ（Vieter）&フレッセ（Fresse）による101点
- 1911年 ブレーメンのヒルマー（Hilmar：商人）とマルティン（Martin：出納長）のデーチェ（Deetjen）兄弟のコレクション278点
- 1914年 北ドイツ・ミッション所属のブレーメンの宣教師カール・シュピース（後述）による101点
- 1918年 東アフリカ・タンガニーカのプランターA・コレンブッシュ（Collenbusch）の遺産111点
- 1936年 上記カール・シュピースによる寄贈117点

市立自然・民族・商業学博物館の開館は1896年1月15日である。それゆえ、1881



年と1894年の大型の寄贈は、その前身であるブレーメン「市立自然史・民族学コレクション」(Städtische Sammlungen für Naturgeschichte und Ethnographie)の時代に実施されたことになる。ともあれ、第一次世界大戦終了年以降1945年までの大型の寄贈となると、上記1936年の北ドイツ・ミッション所属の宣教師カール・シュピースによる寄贈だけであった。なお、北ドイツ・ミッション(Norddeutsche Missionsgesellschaft)とは、1838年にハンブルクで設立されたプロテスタント系の布教組織で、アフリカ西海岸で布教・植民活動に従事し、ブレーメン・ミッションとも呼ばれた<sup>15)</sup>。

また、1894年に寄贈された商業博覧会の民族品とは、上でも述べた1890年開催の「北西ドイツ工業・産業博覧会」における商業部門の展示会「商業・植民地博覧会」に出品された民族品を指す。この北西ドイツ工業・産業博覧会の来場者数は約120万人に及び、当時のドイツでも最大規模の博覧会となったほか、開催に際して収集された商品見本や民族品は、アフリカの民族品を含めて自然・民族・商業学博物館開館時のコレクションの母体の一つとなった。

### (3) 購入・交換

次に、購入については、ブリスコーンに従い交換による入手品(194点)と合わせて見ていくことにしたい。1841年から1945までの期間に購入と交換により博物館の収集品に加わったアフリカの民族品は5,589点であり、このうち大部分(5,395点)が購入によるものであった<sup>16)</sup>。

長期的な傾向を見ると、博物館開館前に購入・交換の記録があるのは1880年、1885年、1887年、1893年、1894年だけである。このうち1887年の買い入れは規模が大きく、この年ノルトハウゼンのヘッセ(Hesse)なる人物がコンゴで収集した民族品(ヘッセ・コレクション:Hesse-Sammlung)216点が一挙に加わった。これにより、前年の1886年から87年にかけてアフリカ民族品のコレクションは、寄贈の21点と合わせて247点から484点と一挙に倍近くに増加した。

とはいえ、購入・交換による入手は寄贈と比べると博物館開館(1896年)後もしばらくの間は低調であり、第一次世界大戦以前に100点以上のまとまったコレクションの購入が見られたのは、先にも述べたカメルーンで司令官を務めたオルトヴィヒ・フォン・カムプツのコレクション330点を購入した1902年(計462点)とバムベルクの軍人H・メルツ(Merz)の収集品91点の購入があった1909年(計195点)のみであった。この両年に挟まれた1903年から1908年にかけての購入・交換によるコレクションの増加は52点のみであり、5年間で761点から813点まで増えただけであ

る。

しかし一方で、博物館は植民地熱の高揚を背景として植民地を含めた海外の諸民族に関する展示施設の拡充に力を入れた。建物の増築にも着手し、工事終了後の1911年7月9日に再度開館した自然・民族・商業学博物館では、西南アフリカをはじめとする植民地に関する展示や解説が増築前よりもさらに充実し、現地の産物や文化、それに植民地でキリスト教の布教に従事するミッション（布教団）についても詳しく取り上げられるようになった。

とはいえ、1911年後もしばらくの間、購入活動は低調であり、ようやく第一次世界大戦の末期を迎えて購入（ならびにわずかな量の交換）活動がコレクションの増加に貢献するようになった。1917年には45点の購入があり、終戦時の1918年にはハンブルクの民族品商ユリウス・コニェツコ（Julius Konietzko）からの購入116点を含む123点を記録、その後も翌1919年に153点、1920年に53点、1921年には128点の購入並びに交換が実施され、アフリカ民族品の増加が続いた<sup>17)</sup>。

注目されるのは、第一次世界大戦終結後、それ以前と比べて寄贈による入手が低調となる一方で購入・交換が活発化していったことである。戦後しばらくして、1924年には455点、1926年には958点、1927年には319点の購入・交換によるアフリカ民族品コレクションの増加が実現した。1926年と1927年の大量購入は、自然・民族・商業学博物館館長フーゴー・シャウインスラント（Hugo H. Schauinsland：1857～1937）が1926年に実施したエジプトでの収集旅行に因むものであろう<sup>18)</sup>。

1933年、ドイツにおけるナチス体制成立とともに、館長シャウインスラントはふさわしくない人物であるとして職を解かれ、その二年後（1935年）に「市立自然・民族・商業学博物館」はナチズムの理念を取り入れて「ドイツ植民地・海外博物館」へと改称された<sup>19)</sup>。以前よりもさらに植民地を前面に掲げた博物館へと改組された後も、アフリカ民族品コレクションは購入活動をおもな手段として増加を続けた。ことに1935年の博物館改称直後に活発な購入活動 — 交換もわずかに含まれる — が見られ、同年は298点、1936年は835点、1937年は227点、1938年は210点、1939年は134点、1940年はわずか6点だったものの1942年は384点と続いた。これ以降は、1945年の敗戦まで購入・交換の記録はない。

アフリカ民族品の主要な調達手段である寄贈と購入について、改めて1841年から1945年までの実施状況を比較すると、第一次世界大戦にいたるまでは寄贈によるコレクションの増加が目立っていたのに対して、その後は購入による増加が目立つようになった。ブリスコーンの集計値を紹介すると<sup>20)</sup>、1884年から1914年までの31年



間のアフリカ民族品の入荷は全体で4,478点であり、内訳は寄贈品が2,877点で全体の64.2%、購入・交換品は1,055点、全体の23.6%であった<sup>21)</sup>。これに対して1915年から1945年までの同じく31年間の入荷は全体で5,325点、内訳は寄贈品が771点で全体の14.5%、購入・交換品は4,533点で全体の85.1%に及んだ。第一次世界大戦を境として、明らかに調達方法が変化したのである。戦後、ドイツはヴェルサイユ条約により全海外領土・植民地を失うが、こうした状況の変化もアフリカ民族品の調達方法に影響を与えたことはまちがいないであろう。植民地を失ってからのもち、博物館は寄贈に代えて購入を主要手段としてアフリカ民族品のコレクションをさらに拡大させていったのである。

### 3. アフリカ民族品収集の担い手

アフリカの民族品はどのような人々により現地で調達され、ブレーメンのコレクションへと加わっていったのであろうか。一般に、民族品の収集者として想定されるのは、現地在住の商人や役人、フィールドワークを実施中の学者、それに旅行者といったところであらうか。ドイツ領のアフリカであれば、これに軍人やミッションの関係者が挙げられるであろう。

ブリスコーンによれば、1841年から終戦の1945年までに博物館に入荷されたアフリカの民族品10,039点のうち、収集者が確認できるものは6,473点、全体の64.5%となり、残りの3,566点(35.5%)は確認ができないという。前者の6,473点のうち、最も多くの民族品を収集したのは現地で活動を続ける軍人であり、1,319点に及んでいる。次いで、契約にもとづき博物館側からの指示通りに動く契約収集者及び博物館関係者が1,267点、以下、ブリスコーンの区分に従えば、ドイツ領植民地の開拓に従事する役人が953点、ミッション所属の宣教師及び事務職員が854点、現地で収集に従事する民族(民俗)学者(Völkerkundler)が569点、ドイツ領植民地在住の開拓民(Kolonist)が270点、アフリカで事業を営む商人や商社およびアフリカとの取引関係を収集に活かすことができた商人や商社が254点、学者(Wissenschaftler)が240点、役人もしくは軍人が236点、商人・商社もしくはミッションが176点、プランテーションの経営者および関係者が129点、アフリカ旅行者が66点、現地で収集された民族品をヨーロッパに卸す専門商人が65点、エジプト学の専門家が42点などとなる<sup>22)</sup>。

以下、軍人、契約収集者及び博物館関係者、役人、ミッション関係者、学者、商人、旅行者の順にコメントしておきたい。

## 軍人

まず、最も多くの民族品を収集した軍人について見ると、概して軍人により集められた品は現地での闘争を通じて暴力的に戦利品として入手されることが多かった。

例えば、カメルーンで軍の司令官を務めたオルトヴィヒ・フォン・カムプツのコレクションの多くは、内陸部の開発を目的として実施された行軍（1898年12月～99年4月）に際して強制的に集められたものであった。中部カメルーンではチバチにあったスルタン（Lamido Hamman Lamu）の宮殿が略奪の対象となり、銅製の大きな鐘や金の刺繍が施された赤い外套、鞍具やスルタンの寝台、ハウサ族の衣装、贅沢な装丁のコーランなどが持ち出された。また、それよりも前の1889年に東アフリカに到着した少尉（Leutnant）のオイゲン・エント（Eugen End）が現地でおもに収集したのは各種兵器や軍備品であり、戦旗や太鼓、弾薬帯（Patronengürtel）も含まれていたという。

軍人による収集の特徴として、収集品のなかに兵器が多く含まれていたことが挙げられる。多くの軍人は現地の言葉と民族学に関する十分な知識を欠いていたので、彼らにより収集された民族品にはこのような偏りが生じてしまうととも、入手に際しての記録が十分でないという問題もあった。記録された各種データに不備があれば、学術的価値は大きく損なわれてしまうことになる。とはいえ、士官クラスの軍人であれば民族学や現地語を学び、収集に際して指導的な役割を担う者もいたので、そのような軍人の下では日常品の収集に重きを置いたバランスの取れた収集が実施されたものと思われる。また、軍人はドイツ勢力の代表として現地の首長から数々の寄贈を受けることもあった<sup>23)</sup>。

## 契約収集者及び博物館関係者

これら関係者が収集した民族品の多くは、1920年代にエジプトで入手されたものであった。博物館開館時から1933年にナチスにより職を追われるまで館長を務めたシャウインスラントは、数ある民族の文化のなかでも古代エジプト文化への関心が強く、1926年にエジプトで収集旅行を実施し、彼の指示のもと現地の収集者や博物館関係者が民族品の収集に従事した。

シャウインスラントが提出した当初の旅行申請書によれば、収集の対象とされたのは民族品に限らず、古代エジプト美術やイスラムの民族品のほか、地学や植物学、動物学、すなわち博物学にまつわる様々な品やテラリウムで飼育可能な生きた動物なども含まれていた。しかし、やがて彼はエジプト人の日常生活にも興味を抱くよ

うになり、今日のエジプト人の生活や日々の営みをイメージさせるような品に関心がある旨、カイロで旅行代理店を営むユリウス・ストラック (Julius Strack) なる人物に宛てた書簡に記している<sup>24)</sup>。

## 役人

植民地の開拓担当の役人は都市部に居住することが多かったので、アフリカ先住民と接触する機会は多くなかったと思われる。それゆえ、彼らにより収集されたものの多くは観光土産 (Touristkunst) のような民族品だったのではないかとブリスコーンは推測する。一方で、高位の役人であれば、軍人と同様になかど現地人から寄贈を受ける機会も多かったようである。

民族品の収集には、現地の税関吏や官吏だけでなく総督自身も携わったことがあった。例えば、先にも述べたトーゴの総督を務めたアウグスト・ケーラーのコレクションは、中部、北部トーゴの民族品から成り、彼の没後にブレーメンの西アフリカ会社のマルティン・パウル (Martin Paul) の仲介により博物館に収められたとのことである。

税関吏の収集物についても見ておけば、ドイツ領東アフリカで上級関税監査官 (Oberzollinspektor) を務めたヴァイアー (Weyer) なる人物からは、業務の傍ら集めた民族品として、家財道具、楽器、動物の角、矢、容器、標識 (Schilder)、こん棒、象牙の信号ラッパ (Signalhorn)、ノコギリエイの歯などの品々が博物館に収められた<sup>25)</sup>。

## ミッション関係者

宣教師などミッション関係者による収集品には、やはり宗教に因んだものが多く含まれた。彼らは布教活動などを通じて現地の人びとと直接接触する機会が多く、それだけに彼らが収集した民族品には貴重なものが多く含まれ、学術的に見ても高水準のコレクションとなっていたのではないかと推測される。

ミッション関係者による収集品の多くは、北ドイツ (ブレーメン) ・ミッションのメンバーが今日のトーゴやガーナで第一次世界大戦以前に収集したものであった。北ドイツ・ミッションは組織立った布教活動を1853年から、まずはイギリス配下のガーナ、黄金海岸地域から開始し、やがてドイツ配下のトーゴへと拡大していった。1902年に『自然科学者、医師としての宣教師』なる著書を刊行したフェルディナント・レプツェルター (Ferdinand Franz X. Lebzelter) は、宣教師こそは (神の) 教えを授けるべく生涯を通じて現地の人びとと交わり生活していくのであるか

ら、学問的関心を持つだけの旅行者以上に現地の人々の生活や行動にまつわる情報をヨーロッパの学界に提供することができるとして、宣教師の民族学者としての適正を好意的に評価している<sup>26)</sup>。

一例として、北ドイツ・ミッション所属のカール・シュピース（Carl Spieß：1867~1936年）について見ておきたい。若くして商人となるべく研鑽を積んでいたシュピースは、たまたまあるミッションの礼拝に参加した際に大きな感銘を受け、あらためてミッションハウス（神学校）でキリスト教諸学だけでなく、地理や歴史、数学、医学、語学、とりわけアフリカの現地語（エヴェ語）の習得に力を入れた。一時帰国の期間を含めて1892年末から1914年5月まで、彼はトーゴやギニアで布教活動に従事しながら民族品や現地人の生活に関する情報の収集に努めた。

シュピースと博物館との関係では、博物館所属研究員であった民族学者ハインリヒ・シュルツに対する貢献が大きい。若くして亡くなったシュルツ（40歳、1904年）は、広く文化や経済、社会について民族学的な素養を生かして接近し、とりわけ宗教や魔術に関する彼の研究には、シュピースから提供されたモノや情報、助言などが大きく役立ったと言われる。シュピースから送られてくるエヴェ地域（トーゴやガーナ）の民族品や人々の暮らしにまつわる情報について、シュルツは書簡を通じて繰り返しシュピースに質問を投げかけた。

互いの交流は、シュピースの著作活動にとっても刺激となったようである。1898年に、シュピースはこれまでの現地での観察や調査に基づく数々の論考を全263頁の一冊にまとめた。その中でシュピースは、ブレーメンのシュルツ博士より与えられた刺激のもと興味深い素材の数々が集められたこと、そしてこの小著が、博士が抱いている様々な疑問の解明に貢献するであろうとの期待を表明しているのである<sup>27)</sup>。

## 学者

学者の収集活動については、民族学者であるフーゴー・ベルナツィク（Hugo Bernatzik）とベルンハルト・シュトルク（Bernhard Struck）の収集活動を例として見ておきたい。

ベルナツィクは1930年から31年にかけて上記のシュトルク、それに自身の妻エミー（Emmy）とともにポルトガル領ギニア・ビサウを移動しながら民族品の収集活動に従事した。移動手段としてはトラックと舟が用いられ、料理人を兼ねた通訳と雑用の少年が同行したという。民族品を手に入れるために交換品としてタバコと真鍮製の針金が用いられたが、たいていは交換を拒否され、収集活動には苦勞し

たようである。入手には説得と何らかの圧力が必要で、場合によっては交換の対価として値の張るものを提供せざるを得ないこともあったという。

例えば、バランテ（Balante）人の集落を訪れた際、ある少年にその少年自作の舞踏用衣装を譲ってくれるよう懇願したものの、うまくいかないことがあった。そこで、あらためて村の有力者に少年の説得を依頼したところ、当の少年もようやく同意はしたものの、結局は一年間の納税額に匹敵する貨幣とタバコとの交換になってしまったという。とはいえ、少年は涙ながらに交換の品を受け取ったとあるので、できれば交換は避けたかったというのが少年の本心だったのかもしれない。彼ら一行は、埋葬されていた人骨を一部無断で持ち出してしまったこともあったらしい。そのことを、ベルナツィクの妻エミーは後日出版した旅行記の中で告白している<sup>28)</sup>。

## 商人

商人については、アフリカでの事業の傍ら収集に従事する商人（商社）やアフリカとの取引機会を収集に活かすことができた商人（商社）、それに標本商や美術商のような専門商人を併せて扱う。

ブレーメンの商人がアフリカ西海岸で取引を開始したのは1841年のこととされる。1850年代半ばになると、ブレーメンの商社フィートア社の進出が始まり、1857年に同社の支店がトーゴに置かれた。それ以降、同社をはじめとするドイツ系商社の支店網が沿岸部を中心に張り巡らされていった。

フィートア社は北ドイツ・ミッションとのつながりが強く、とりわけ1880年代から90年代にかけてトーゴに滞在したヨハン・カール・フィートア（Johann Karl Vietor）は同ミッションの理事を務め、組織の拡大に貢献し、その父コルネリウス・ルドルフ・フィートア（Cornelius Rudolph Vietor）は北ドイツ・ミッション設立の中心人物の一人だったという<sup>29)</sup>。

1898年1月19日付でヨハン・カール・フィートアが博物館館長に宛てた書簡には、旅の途中トーゴの内陸部で貴殿の博物館にうってつけの猟師がかぶる帽子を手に入れたとあり、商人が事業を営む傍ら博物館のことを念頭に置きながら収集活動に従事していた様子をうかがうことができる<sup>30)</sup>。

トーゴでは、例えば港町のロメで市が開催される際には地元の人びとがヨーロッパの商人にゴムや象牙、コーヒーなどを販売したが、おそらくは各種民族品もこのような場を通じてヨーロッパ側に渡ったものと思われる。むろん、商人自らが築き上げた個人的な信頼関係を通じて民族品が提供されたこともあっただろう。

また民族品を扱う専門商としては、ハンブルクの商人ユリウス・コニェチコやJ. F.G. ウムラオホ (Umlauff) 社と博物館とのつながりが強かった。軍人や役人、ミッション関係者など現地滞在者の収集品も、このような民族品を専門的に扱う商人(商社)の仲介を通じて博物館に収められたことがあったと考えられる。

第一次世界大戦の開始により、ドイツ商人のアフリカ事業は中断を余儀なくされ、それに伴い商人を通じた民族品の収集活動も停止してしまった。点数の面から見れば、アフリカ民族品コレクションの規模拡大に対する商人の直接的な貢献はそれほど大きくはなかったが、博物館と地元ブレーメンの商業界との間には強い信頼関係があった。その結びつきがあったからこそ、博物館は「自然史博物館」、「民族学博物館」に加えて「商業学博物館」としての性格をも兼ね備えていくことができたのである<sup>31)</sup>。

## 旅行者

旅行者による収集品の数は少ない(66点)。アフリカの旅行者のなかには学問的な意図をもって各地を旅行する者も多かったので、ここには表立って学者を名乗らない者も含まれているかと思われる。なかには、少なからず学問的な野心を抱き、将来の栄達を思い描きながら探検・調査旅行を実施した者も存在した。一例として、ウィーン出身のエミール・ホルプ (Emil Holub : 1847-1902) という医師・旅行家について見ておきたい。

ホルプは、1872年から79年にかけて医師として活動しながらボツワナなどアフリカ南部を旅して回った。妻が旅に同伴することもあったという。自然科学に加えて民族学にも関心を抱いていたホルプは、帰国後は滞在先の文化に関する著書を出版するとともに、プラハとウィーンで自らの収集品を公開して展示会も開催した。各地を講演して回り、誇張も交えた自らの経験を題材とした講演は好評であったようである。

ブレーメンとの関わりについて見ると、1881年に彼の収集品の一部(41点)が博物館 — 開館前のまだ「市立自然史・民族学コレクション」と呼ばれていた頃 — に収められた。この寄贈はブレーメン地理学協会の仲介により実現したとのことであるが、すでにホルプは「市立コレクション」時代の博物館を観覧したことがあったので、その時すでに彼と博物館との間に何らかの関係が生じていたのかもしれない。

しかし、ホルプのコレクションの寄贈先はブレーメンに限られなかった。なんと113もの博物館や研究機関に彼がアフリカで収集した博物や民族の品が収められた



というのである<sup>32)</sup>。年齢は30代半ば、そろそろ中堅の域に達しようとしていたホルプにとっては、研究者としての自分を広く知ってもらい、願わくは、どこか学術研究機関からポストの提供があってほしいとの期待を込めての、一種の請願活動だったのかもしれない

ブレーメンとホルプとの関係についてもう一つ取り上げておこう。「市立コレクション」では、1896年の「市立自然・民族・商業学博物館」の開館に向けてアフリカ南部（ザンビア）の一民族の生活空間を示す大規模な、おそらくは等身大のジオラマの作成が計画されたが、ホルプはその作成に際して協力者の一人として名前を残しているのである。ただし、このジオラマは第二次世界大戦のさなかに破壊されてしまったとのことである<sup>33)</sup>。

ホルプの生涯を振り返れば、結局、彼は研究者としてどこか特定の組織のポストを得ることはなかった。とはいえ、1887年にはドイツの著名な学術団体である「ドイツ自然科学アカデミー・レオポルディーナ」（通称レオポルディーナ）の会員に選ばれている。レオポルディーナ（Leopoldina）は、一説によれば、世界最古の現存する自然科学者アカデミーであり、ゲーテ、ダーウィン、アインシュタインもその会員であった。世界最高峰ともいえる知性により支えられてきた学術機関であり、その会員であることを、おそらくホルプはたいへん名誉なことと感じていたことであろう。1901年からは、母国オーストリアから年金も支給されるようになったとはいえ、翌1902年にホルプは亡くなった<sup>34)</sup>。

## 結び

以上、ブレーメン市立自然・民族・商業学博物館のアフリカ民族品のコレクションを取り上げ、ブレーメンおよび当博物館とアフリカとのかかわり、民族品収集の手段、収集の担い手の順に検討を加えてきた。植民地熱の高まり、そしてドイツ帝国の積極的なアフリカ進出を背景として、博物館のアフリカ民族品のコレクションは規模を拡大していった。本稿では、その具体的な拡大の過程の一端をベッティナー・フォン・ブリスコーンの研究成果に依拠しながら解明してきた。市民に向けた教育・展示・研究機関として、市立自然・民族・商業学博物館は、アフリカをはじめとする植民地に関する民族品の収集・展示に力を入れるようになったのであった。

第一次世界大戦終了後、ドイツは海外の植民地を失ったとはいえ、前稿でも触れたように、ブレーメン市立自然・民族・商業学博物館のドイツ植民地に関する展示

は、1911年に再度開館した際の展示が1935年までほぼそのままのかたちで維持された。上でも述べたように、この年、博物館はナチス体制のもと「ドイツ植民地・海外博物館」と改称され、館長シャウインスラントはその二年前（1933年）に失職していた。これは、シャウインスラントのもとで「新時代」に即した博物館運営は無理である、とのナチス関係者の判断に基づく決定であった。彼とともに、ユダヤ系の博物館関係者も職場を去った<sup>35)</sup>。

ドイツが植民地を失ったのちも、博物館はアフリカなど旧植民地地域の民族品の購入を続けた。コレクションの維持・拡大、そして展示と解説を通じて、市立自然・民族・商業学博物館（ドイツ植民地・海外博物館）は、植民地に関する記憶の維持と植民地主義の普及を支えていったのである。

## 注

- 1) 谷澤毅「商業都市に博物館をつくる — ブレーメン「市立自然・民族・商業学博物館」の近代」、『長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）』第55巻第4号、2022年、203-220頁。
- 2) Bettina von Briskorn, *Zur Sammlungsgeschichte afrikanischer Ethnographica im Übersee-Museum Bremen 1841-1945*, Übersee-Museum Bremen, Bremen, 2000.
- 3) 植民地との関係を視野に入れながら収集（蒐集）について取り上げることの意義は、以下の引用文からも見て取ることができるだろう。「蒐集」は近年、経済学において資本主義の歴史的原理を説明し、西欧史を見ていくうえで最も大切な概念のひとつであるとされる。西欧そのものが「社会秩序それ自体が本質的に蒐集」であり、周辺から中心に向けて農産物や利潤、領土や文化を集中させる仕組みである資本主義は、「蒐集」にとって最も適したシステムであったと説明される」。改めて述べるまでもなく、近代資本主義において、博物館における収集という行為は植民地主義と強く結びついていたのである。君塚仁彦「植民地主義と博物館・博物館学」、石井正巳編『博物館という装置 — 帝国・植民地・アイデンティティ』勉誠出版、2016年、370-371頁。
- 4) 栗原久定『ドイツ植民地研究 — 西南アフリカ・トーゴ・カメルーン・東アフリカ・太平洋・膠州湾』合同会社パブリブ、2018年、10-12、42頁。望田幸男「ビスマルクの時代」、成瀬治・山田欣吾・木村靖二編『世界史体系 ドイツ史2 — 1648年～1890年』山川出版社、1996年、第十章、464-465頁。
- 5) 谷澤毅「商業都市に博物館をつくる」、209-211頁。
- 6) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.40-41.ただし、ブリスコーンが掲載しているアフリカ民族品の増加の過程を示すグラフに1845、46年の記載はない。S.154,Abb.1.
- 7) Ebenda, S.68. 栗原久定『ドイツ植民地研究』、180、182頁。
- 8) 以上、アフリカ植民地と博物館との関係については、Bettina von Briskorn, a.a.O., S.69-75を参照。
- 9) なお、ドイツでは1889年の連邦参議院の決定により、公的なルートを経て入荷された植民地の民族品など学術関係の品々は、まずベルリンに送られて同市の民族学博物館により重複の有無の確認とともに正式な記録がなされてから各博物館に発送されるようになった。このような取り決めがなされた背景に、植民地政策の展開のもと国内の博物館に流入する各種民族品の急増があった。この取り決めがどの程度遵守されたかは不明であるが、第一次世界大戦期まで効

- 力を有したようである。Ebenda, S.65-67.
- 10) Ebenda, S.45.
  - 11) ただし、戦後西ドイツ時代の高度成長期を含めるとこの比率は異なってくる。すなわち、1841年から期間を延長して1990年までを見ると、全体の46.9%に当たる6,617点が寄贈によるもの、45.6%に当たる6,435点が購入によるものとなり、以下3.3% (468点) が交換、3.9% (552点) が貸与品、0.2% (33点) が不明となる。戦後の成長期には寄贈が多く、1841年から1990年までの期間全体では寄贈と購入はほとんど拮抗するのである。Ebenda, S.153.
  - 12) Ebenda, S.155-157.
  - 13) Ebenda, S.156, Abb. 2.
  - 14) Ebenda, S.155.
  - 15) 栗原久定『ドイツ植民地研究』、110-111頁。
  - 16) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.157.
  - 17) Ebenda, S.157.158, Abb.3.
  - 18) Hugo H. Schauinsland, *Unterwegs in Übersee. Aus Reisetagebüchern und Dokumenten des früheren Direktors des Bremer Übersee-Museums. Bearbeitung, Kommentierung, begleitende Texte und Fotoauswahl von Anne E. Dünzelmann. Mit Beiträgen von Viola König und Andreas Lüderwaldt. Herausgegeben vom Übersee-Museum Bremen, Bremen, 1999, S.31.*
  - 19) 海外博物館のホームページの年表。 <https://www.uebersee-museum.de/wp-content/uploads/2020/12/Chronik-des-Uebersee-Museums-1.pdf> 2022年12月9日閲覧。
  - 20) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.166.
  - 21) 1884年はトーゴとカメルーンのドイツによる支配がベルリン会議で認められるなど、ドイツのアフリカ支配にとって画期となる年であった。
  - 22) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.162, Abb.5.
  - 23) Ebenda, S.132-136.
  - 24) Ebenda, S. 80-81,161.
  - 25) Ebenda, S.161,249,330.
  - 26) Ferdinand Franz X. Lebzelter, *Katholische Missionäre als Naturforscher und Ärzte. Als Vorläufer und Fahrtgenossen Alexander v. Humboldts. Gedenkschrift zur hundertsten Jährung der Humboldts in die Äquinoctial-Gegenden des Neuen Continentes, Wien, 1902, S.7 (筆者未見). Bettina von Briskorn, a.a.O., S.128,149,161,182.*
  - 27) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.75-78.
  - 28) Ebenda, S.140-141. S.152, 187.
  - 29) 栗原久定『ドイツ植民地研究』、112頁。
  - 30) Bettina von Briskorn, a.a.O., S.124,327.
  - 31) Ebenda, 124-127,161,163.
  - 32) Dietmar Henze (Hg.) *Enzyklopädie der Entdecker und Erforscher der Erde, Bd.2. Graz, 1983, S.616 (筆者未見). Bettina von Briskorn, a.a.O., S. 147, Anm.55. S.180.*
  - 33) Viola König, *Wie es war, wie es ist, wie es sein soll. Eine Analyse nach sechs Monaten Leitung des Übersee-Museums, in: TenDenZen 92. Jahrbuch des Übersee-Museums I, 1992, Bremen, S.43.*
  - 34) ホルプについては、Bettina von Briskorn, a.a.O., S.56, 122-123, 238-239のほかにも以下を参照した。レオポルディーナのホームページ <https://www.leopoldina.org/en/about-us/about-the-leopoldina/history/the-history-of-the-leopoldina/> 2023年1月20日閲覧。Emil

Holub, WIKIPEDIA Die freie Enzyklopädie [https://de.wikipedia.org/wiki/Emil\\_Holub](https://de.wikipedia.org/wiki/Emil_Holub)  
2023年1月20日閲覧。

35) Hugo H. Schauinsland, a.a.O., S.31,35,37.